

しょうか。無心に受け入れ、実行したことから当たり前の事として身につくのではないでしょうか。もちろん「悪いことへの慣れ」にも通ずるものがあります。それをどのようにして与え、育て

成長させれば良いのか、還暦をとうに過ぎた私が苦手「スイミング」をとおして深く考えるものがあることを痛感しております。

(華の会)

## 慣れるには

## 考えることと時間が必要

鈴木 洋

内科の先生と話すときよくこんな事を言われます。「子どもは苦手だ、話はうまくできないし。診察すれば泣いて、まったくわからない」。それに対しぼくは「大人は診察中、自分の都合のいいことは言うが、そうでないときは嘘を付くこともあるから難しい」と答えます。立場が違うと、苦手なところも違うのです。

内科の先生は子どもが泣くことが苦手のようですが、小児科医は対象が赤ちゃんです。泣かない赤ちゃんはいません。普通、大人は他人の前では感情を押えます。泣くことは特別の時です。子どもはいろんな理由で泣きます。泣いている声で僕たち小児科医はいろいろと考えます。おなかがいっているのか、おむつが濡れているのか、どこか痛いのか、こわがっているのか、寂しいのかなどです。

これらのことは多くの赤ちゃんにつきあっている

ればだんだんとわかってきます。医者であるぼくは泣き声を病気を中心に考えます。しかし子どもにつきあっている保母さんとはぶん子どもの気持ちを中心に考えるのではないのでしょうか。お母さんは生まれたての赤ちゃんの泣き声が何で泣いているのか初めはわかりません。しかし、おっぱいや、ミルクを与えると泣き止めば今の泣き声はおなかがすいていたのだなということがわかりま



す。おっばいや、ミルクは一日に何回も与えます。何回も泣けばそれがおなかのすいたときの泣き声であることは自然にわかっています。抱いて泣き止めば赤ちゃんは抱いてもらいたいんだなということがわかってきます。おなかがすいた、おむつが濡れた、なにかおもしろくないことがあったなど日常的なことで泣けばお母さんはその理由がだんだんとわかってきます。

しかし病的なこととはそうは経験しないのでお母さんも迷うことがあります。小児科医は病的な泣き声がどんなものを判別するのが仕事なのでこの判断能力はだんだんと育ってきます。慣れていると言えばそれまでですが、慣れるまでには時間となぜと考える経験が繰り返されます。なにも考えないで、赤ちゃんの泣き声を聞いていたらたぶんなぜ泣いているかわからないと思います。

内科の先生は赤ちゃんの泣き声を聞いてもただ

うるさいと思うだけだから苦手になるのではないのでしょうか。僕たち小児科医は赤ちゃんの泣き声から病気を診る責任があるからまじめに対応するのです。お母さんは赤ちゃんを育てる責任があるから泣き声にきちんと対応できるようになるでしょう。

「慣れる」は広辞苑には「物事を絶えず触れることによって、それが平常と感じられるようになる」と書いてあります。たびたび経験して常の事となる。また、たびたび行ってそのことに熟達する」と書いてあります。何回も経験しそのことを理解して初めて慣れているといえる状態になります。

ぼくは二十年以上小児科医をしています。この二十年の意味は何となく二十年たったという意味ではありません。いろんな病気を診、勉強し、親と一緒に悲しみ、喜んだことのある二十年です。

病気のこと以外のこととも医者として考えた二十年

なのです。そして初めて「二十年の経験のある小児科医です」といろんな人に言えるのです。子どもが扱いになれていると言ってもそれなりの時間と経験が必要なのです。

ぼくには小児科医としての二十年の他に、日本人としての四十七年、父親としての十五年、結婚しての十七年などいろいろな自分があります。

日本人と言えるのは両親が日本人だけではありません。日本語を話せることだけでもありません。日本の文化、歴史を学び、経験しているから日本人といえるのです。日本で生活していると日本人という事をほとんど意識しません。しかし海外にでると自分が日本人であることをいやがうえでも意識させられます。当たり前のことでも状況が違えば当たり前でなくなりえます。海外にでると、お金が違います。言葉が違います。電車の乗り方などいろんな事が違います。そして慣れるま

で時間がかかります。自分が慣れて当たり前と思っていたことがそうではないことに気がつきます。

「慣れ」は決して悪いわけではありませんが、当たり前が当たり前でないことも考える必要があります。僕たち医者には主に病気を診ています。ごくありふれた病気から、珍しい病気まで診ます。外来で、お母さんから「風邪ですか」と聞かれ、「はい、風邪です」と答えればそれでお互い納得して終わりです。しかし、別の病気を言えばお母さんとぼくの間には緊張が走ります。その緊張をやわらげるため、いろいろと病気の説明をします。お母さんが納得すれば緊張は徐々に消えていきます。しかし、病気の中には元々よくわかっていないものもあります。なかなか緊張がなくなるはず不安だけが残ることもあります。

同じようなことは保育園や、幼稚園などでもあ

るのではないでしょうか。普通、保育園や、幼稚園は健康な子どもがいる場だと思われています。

その中に、自閉症のようなコミュニケーションがうまくとれない子どもが入ってくると園は困惑するようです。時々、このような親から「うちの子を園でどのような対応したらいいか医者に意見書を書いてほしい」といつてくることがあります。

一般的な子どもと違ってこれから病名が付いていますが、医学的には十分わかっています。病気の説明をしてもなかなか理解してもらえません。

僕は「他の子どもと同じように対応すればいいし、困ったときにはその場の先生の判断でいいんです」と答えています。赤ちゃんを育てるお母さんのようにつきあいながら悩み考えてゆけば不安などなくなるのではないのでしょうか。

初めは知らないと不安を感じると思いますが、考え、時間がかつと慣れてきて不安は徐々になく

なります。しかし慣れればなしになると変化に気が付かないことがあります。当たり前だに思っていることに少し変化があったとき、「あれ」と思うことは非常に大切ではないのでしょうか。「あれ」と思わなければそれは慣れではなく、なにも考えてないことだと思えます。

(鈴木こどもクリニック)

